熊野から世界へ
――平和への道・合気道――

和歌山県田辺市に生まれた合気道の開祖・植芝盛平翁は、「心を技に表現するのが合気道だ。勝ち負けを言うのは古い」と、弟子たちを諭した。試合を行わない合気道の精神は、「攻撃を止めるための平和の術」として世界に広がり、熊野の地まで修行に訪れる外国人も多い。

植芝盛平翁。合気道の創始者。和歌山県田辺市出身。19歳から各地で武術遍歴を重ね、独自の武術を会得した。同郷の南方熊楠の神社合祀反対運動に共鳴、「人格完成を目指す武道」として、合気道を世界に広めた。

熊野本宮大社

奉納演武を行う大斎原（日本一の高さを誇る大鳥居）

合気道の精神的ルーツが紀州・熊野にあったことをご存知でしたか？

「戦うためではなく、あくまでも自分に向けられる攻撃を止めるための平和の術」という理由から試合を行わない合気道。その創始者・植芝盛平翁（一八八三―一九六九）は和歌山県田辺市に生まれ、生涯に百数十回も熊野三山へ参拝したという。

それは何故？

「爺は本宮の申し子」

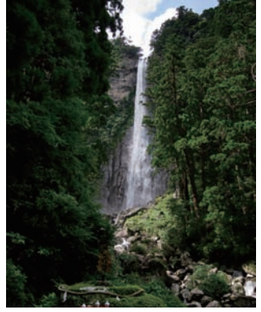
新宮市の熊野速玉大社の鳥居から約三十㍍、植芝翁が命名して一九五三（昭和二八）年に開かれた合気道道場「熊野塾」。その道場長、庵野素岐さん（七六）によると、植芝家には女の子しかいなく、男の子が欲しかった両親が熊野本宮大社（田辺市本宮町）に祈願して授かったことから植芝翁は生前、「爺は本宮の申し子や」と語っていたという。

植芝翁は、合気道を「自然と人の和合の道」、「世界をひとつに和合させる道」として確立し、その精神は国境を越えた。今年七月、庵野さんが新宮市の姉妹都市・米国カリフォルニア州サンタクルーズ市を訪問した際、エミリー・レイリー市長が「七月十四日を『合気道の日』とする」と声明した。熊野塾で学んだ人がサンタクルーズ市で道場を開いた縁で結んだ姉妹都市提携が、海の向こうで「合気道の日」の制定につながったのも、そこに平和の精神あってのことだろう。合気道は今では世界八十五カ国に普及し、弟子や愛好家の数は百五十万人とも言われている。

ハリウッドスターも熊野へ

熊野塾へは、合気道の精神に魅せられた人々が世界中から集まってくる。フランス、スイス、フィンランドをはじめヨーロッパ各地やアメリカからも。その中にはハリウッドのスター、スティーブン・セガールもいたそうだ。定期的に修行に訪れる外国人は五十人を下らない。

フィンランド南部・トルク市のヘイッキ・サーレンケトさん（二九）は今夏、二年ぶりに熊野塾を訪れ、二週間稽古した。「九年前、東京の本部道場で始めた。でも新宮に来て、他にはない、ここにしかない雰囲気を感じた」と、熊野塾に通う理由を語る。フィンランドでは新聞社で働きながら、大学に通う生活。二年前に初段になった。「倹約して日本への飛行機代を捻出している。年に一度は来たいけど、難しい」と笑った。



那智の滝

来秋、開催。国際合気道大会

来秋、和歌山県田辺市を会場に第十回国際合気道大会が開催される。四年に一回開かれる大会で、東京で開かれた前回は四十二カ国から約二千人が参加した。来年は同時に、植芝翁没後四十周年記念事業も行われ、熊野本宮大社の旧社地・大斎原では、「奉納演武」も開催される予定だ。植芝翁の理念と心の修行の原点に帰ることの大切さを説く「熊野本宮合気塾」塾長の須川勉さん（六一）は「心の修行には大斎原が最適。愛の武道、平和を世界に発信したいんです」と熱い思いを語ってくれた。

植芝翁は生前、「熊野の気の働きが合気道だ」と弟子に説いたという。熊野速玉大社の摂社・神倉神社から熊野灘を見渡す時、熊野那智大社から水煙を上げる那智の滝を見上げる時、熊野本宮大社・大斎原で熊野川の流れに耳を澄ます時、植芝翁がいう「自然との和合・一体感」を感じることができるのかも知れない。熊野へ旅する時には是非、その一体感を味わってみて欲しい。

（戸塚敦子）

右：ヘイッキ・サーレンケトさん

国際色豊かな熊野塾